

神之田常盛前会長逝去



神道夢想流
日本杖道会会報

第40号

発行日 平成27年10月

発行人 日本杖道会

編集人 佐藤 暢

印刷所 萩原印刷(株)

平成27年3月9日未明、日本杖道会前会長・総師範であり神道夢想流杖道振興会会長の神之田常盛先生が、療養中の清瀬市の信愛病院にて他界された。法名「釋常真」、享年87歳。

本葬は4月19日(日)、日本杖道会・神之田家の合同葬として、東京青山の梅窓院にてしめやかに挙行された。前日の稽古の後、準備に取り掛かるに際して大里耕平葬儀委員長より総務委員となる会員に向けて「一人一人が役割をしっかりと担い、皆で神之田先生を盛大にお見送りしよう」との言葉があり、阿部修総務委員長の的確な指揮のもと全員一丸となってこの日を迎えた。

当日は空模様心配されたが大きく崩れることもなく、日本各地や海外から約三百名の来臨を得た。式次第に従い葬儀委員長として大里耕平日本杖道会会長の謝辞、導師の読経に続き、杖道師範であり警視庁の後輩にあたる古川瞬也様、ならびに門下生を代表して加藤一男様より心温まる弔辞が述べられた。また、亀卦川慧様より神之田先

生を称える七言絶句の吟詠、藤かほりこと佐藤政子様からは神之田先生の人を謳った「男の夢 十二代・神之田 慈恩」の高唱があり、列席者の涕泣を誘った。故人の長女で喪主を務める神之田早子様との挨拶の後、参列者全員が順次焼香し最後の別れを惜しんだ。

当会は神之田先生のご指導のもとさまざまな大会や行事を主催してきており、その運営経験についても貴重な財産となっている。私たち会員にとっては、葬儀を滞りなく終えたことに安堵すると同時に、神之田先生の功績を改めて実感し、感謝とともに遺された武道の継承と普及に尽力することを胸に秘める一日となった。今後の当会の指針とすべく、参列者へ手渡された冊子に載せられた大里葬儀委員長の御礼のことばの全文をここに再掲したい。

御礼のことば

葬儀委員長 大里 耕平

本日は、故 神之田常盛 日本杖道会前会長の葬儀にあたり、ご多用中にもかかわらずご列席を賜りまして、まことにありがとうございます。

既報の通り、故人はかねて病氣療養中のところ、薬石効なく去る三月九日未明、眠るように87歳の生涯を閉じました。生前のご厚誼に対し日本杖道会を代表し、また親族一同に代わりまして厚く御礼申し上げます。

故人は一九二八年（昭和3年）、鹿児島県阿久根市に生を享けました。武道の盛んな土地柄、小学生の頃から剣道を手始めにさまざまな武道に親しんでいたと伺っています。長じて南満州鉄道株式会社に入社、終戦により帰国後は警視庁警察官を拝命しました。

一九五四年（昭和29年）に当時警視庁の武道講師を務めていた神道夢想流第25代 故 清水隆次師範と邂逅を得てその門に入り、ますます武道・武術の魅力に傾倒、その姿勢は長きに渡った警視庁機動隊に奉職の後も、生涯変わることがありませんでした。

とりわけ杖道においては、民間や公的立場に拘わらず、清水師範から受けた教えを一滴も漏らさずに後進に伝えることを使命と考え、一途に稽古に取り組んでおられました。その頃から私にとって、神之田師範は清水師範に次ぎ、師匠と仰ぐ存在でした。錬武館時代のこと、ある年の暮れに一年を振り返って神之田師範と共に稽古しなかつた日数を指折り数えたら五本の指に収まったときもありました。

一九七八年（昭和53年）、日本杖道会の本部道場である藏脩館に稽古場を移し、その直後に清水師範が逝去されて以来、神之田師範に引つ張られてこ



大里葬儀委員長の挨拶

まで来られた思いで感無量です。

精力的に普及活動に打ち込みながらも先人の訓えの探求に勤しみ、同時に術技の研究を怠らず自らの記録も残す、まさに超人的な生きざまの背中を夢中で追って参りました。頑固一徹な面は、ある意味組織作りには不向きと思えましたが、日本各地はもとより欧州、北米、果てはブラジルまでも、請われれば手弁当で指導に赴き自ら手本を示すその熱意と果敢な行動力は、国境や人種を越えて多くの人々の共感を得ました。名前の通り、常に盛んな人生を全うされたことを、門下生の一人として大変誇りに存じます。

後事を託されたわれわれは一致団結し、故人が残した灯火を絶やすことなく、微力ながらも杖道をはじめとする武道・武術の振興と伝承に尽力することをここに改めて誓う所存です。今後とも、これまで同様に皆様方のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます、御礼のご挨拶とさせていただきます。

本日はまことにありがとうございます。
平成27年4月19日



都心にありながら静寂な佇まいの梅窓院入口

